

～希少がんを知り・学び・集うセミナー！～

希少がん Meet the Expert

第 8 回 「小腸がん」開催レポート

第 8 回「希少がん Meet the Expert」が 8 月 10 日 (木)、国立がん研究センター希少がんセンターにて行われました(共催:がん情報サイト「オンコロ」、認定 NPO 法人キャンサーネットジャパン)。今回のテーマは「小腸がん」。同センター消化管内科の本間義崇先生をお迎えし、講演いただきました。司会は希少がんホットライン担当看護師の加藤陽子さんです。



小腸は、もともとがんができていく臓器であり、罹患しても初期は無症状のため、かなり進行した状態で発見されることが多いがんです。今回は、小腸にできる主な悪性腫瘍である「神経内分泌腫瘍」「小腸腺がん」「悪性リンパ腫」「肉腫」のうち、小腸腺がんについての解説がありました。(「神経内分泌腫瘍」は第 9 回、「肉腫」は第 2・3 回の希少がん Meet the Expert にて解説)

小腸腺がんは、年間 0.22～0.57 人/10 万人に発生するという、非常にまれながんです。リスク要因は、クローン病に代表される炎症性腸疾患、遺伝性疾患、消化管吸収障害など。早期発見が難しい腫瘍ですが、「カプセル内視鏡」の普及に伴い早期発見例が増えることが期待されます。

「腫瘍の大きさよりも、リンパ節転移がどのくらいあるかでステージが大きく変わってきます。今のところいずれのステージでも標準治療は定まっていません」(本間先生)。

同じ消化器がんである大腸がんとの共通点が見られることから、治療は大腸がんに沿って行われます。「可能であれば外科手術で完全切除を目指す。切除不能・転移・再発の場合の 1 次化学療法では、フルオロピリミジンとオキサリプラチンの併用療法が一番いいのでは、というのが現在の認識です」とのお話でした。

また、小腸がんは完全切除が達成できたとしても術後に再発することが多いた



め、それを防ぐための術後化学療法の効果を検証する臨床試験「BALLAD 試験(ヨーロッパ)」や「J-BALLAD 試験(日本)」が行われているとのことでした。



続いての Q&A では、本間先生と加藤さんに、オンコロ・コンテンツ・マネージャーの柳澤昭浩さん、同じくオンコロの可知健太さんが加わって行われました。

質問は、「治験について」「免疫チェックポイント阻害剤や分子標的薬の小腸がん治療への期待は?」「年齢と進行の速さには関係があるのか」「一般の人が論文を入手する方法は?」など。正しい情報を得ることにおいて、本間先生は、「報道では、情報の一部分だけを取り出して書かれていることがあり、実際の解釈とは異なる内容が伝えられていることがありますので、報道内容をそのまま鵜呑みにしてしまわないよう注意が必要です」と指摘し、柳澤さんより「情報は、できる限り一次情報(医師などから直接得る情報)から得てほしい」とお話をされました。(報道は二次情報)

小腸がんのセミナーは国内で珍しく、「最新の治療や情報収集のために参加した」という人がいた反面、「説明を聞けば聞くほどまだ先がみえず不安」という声もありました。参加者は、まれながんだからこそその厳しい現実を目の当たりにし、不安を感じることもあるようです。しかし、「同じ病気の人と交流を持ちたかった」と思って参加されている方もいたことから、このセミナーは、情報収集にプラスして、支え合う仲間を見つける場としても活用されているようです。(詳しくは動画をご覧ください)



(開催日:2017年8月10日/写真・文 木口マリ)

【共催】

国立がん研究センター希少がんセンター/がん情報サイト「オンコロ」/認定 NPO 法人キャンサーネットジャパン

【後援・運営協力】

株式会社かるてぽすと/樋口宗孝がん研究基金/株式会社クリニカル・トライアル/株式会社クロエ